広島大学大学院教育学研究科紀要　第二部　第53号　2004　319－325

学校体育における民俗舞踊の取り扱いに関する研究(2)

― 舞踊ビデオ視聴によるイメージを中心に ―

松　尾　千　秋

(2004年９月30日受理)

A Study on Japanese Folk Dance in Physical Education (2)
– The image from the japanese folk dance videotape –

Chiaki Matsuo

The purpose of this study is to explore the conduct of japanese folk dance in physical education, on the image through audio-visual aids, videotapes. One of them is "Soran-bushi", the other is "Hanagasa-ondo" by several productions. The subjects of this study are 118 university students.

The results of this study are as follows:

1. They are tend to have heavy, dark, irregular, tender, strong and difficult image from the words "Japanese Folk Dance".
2. Though "Soran-bushi" and "Hanagasa-ondo" belong to the same japanese folk dance, the images from each of them are diffrerent becouse of the specific characeristics of a region and a way of life.
3. Though the same number "Soran-bushi", the different arrange of music give birth to the different coreograghy and the different image.
4. The newer the videotape, the more beautiful, light, strong, difficult and large the image.

Because of the change of the image of japanese folk dance through audio-visual aids, videotapes, we can organize the new knowledge for japanese folk dance in physical education. And to the folklore and the recreat of japanese folk dance we must explore into teaching material agreeable to the learners' rhythm of the age.

Key words : Japanese folk dance, Videotape, Soran-bushi, Image
キーワード：日本の民俗舞踊，ビデオテープ，ソーラン節，イメージ

Ⅰ．緒　言

１．学習指導要領における民俗舞踊の位置づけ

高度経済成長期が過ぎ，新しい時代にふさわしい教育に関して，生涯という時間軸と，学校・家庭・地域という空間軸を考慮にいれた教育的振興策が求められるようになり，日本の伝統・文化の尊重，郷土や国を愛する心と国際社会の一員としての意識の慣用がクローズアップされてきた。

振り返って，戦後の学校体育指導要綱や学習指導要領の「表現運動・ダンス」領域においては，概ね，「フォークダンス」と「表現・創作ダンス」が２大領域として位置づけられてきた。しかし，そのなかで，日本の民踊を含むフォークダンスの位置づけは，終戦直後（昭和22年）と昭和50年代（昭和52年・小中学校，昭和53年・高等学校）には，補助的な教材としての位置づけであった。この時代は，日本の民踊を含むフォークダンスが学校体育から排斥された時代で

あったとも考えられる。それが，今日，学習指導要領の改訂のポイントの一つとしてクローズアップされるようになり，学習指導要領（体育科・保健体育科）において主領域として位置づけられ，「日本の民踊」という用語によって記載されている。「日本の民踊」は「表現運動・ダンス」領域の「フォークダンス」の項に含まれ，そこでは，「地域に伝承された民踊を取り上げて踊る」ようにし，「日本各地の代表的な民踊に取り組む場合は，特徴の異なった踊りを味わえるようにする」ことが求められている。

2．民俗舞踊とは

学習指導要領において用いられている「民踊」という用語は，広辞苑等には項目がなく，フォークダンスの項目に「民族舞踊」という用語が記されているのみである。しかし，「民族舞踊」の項目はなく，「民俗芸術」の項目に，「盆踊」という用語が記されている。一方，「民謡」の項目には，「①民衆の歌謡。郷土の庶民の間に自然に発生し，その生活・感情を素朴に反映した歌謡。労作歌，祝賀歌，舞踊に付随する踊歌などがこれに属する。②広く地方色を帯びた新作歌謡（新民謡）を含む民間歌謡。」という内容が記されている。このように，国語辞典に記載されている用語の記載の仕方においてさえ，「民俗」と「民族」，「踊」と「謡」が混在している。

これらのことから，学習指導要領に記載されている「民踊」の「民」とは，「地域に伝承された」という前言を考慮に入れると，「民族」ではなく，「民俗」の略語として位置づけられていると理解するのが妥当であると考えられる。混乱を避けるためにも，「民俗舞踊」という明記を要望する。

3．学校教育における民俗舞踊の意義をめぐって

本田（1992）は，地域に根ざしたダンス教育をめざし，「急速な社会の変革は芸能や祭りの変容を余儀なくし，従来の伝承方法をそのまま踏襲するだけでは，伝承があやぶまれている事例が多いと聞く。伝統芸能の継承という意味からも，新しい伝承方法へのとりくみや芸能を土台とした新しい交流の場の創造の試みが必要とされているのではないだろうか。」と，その必要性を述べている。また，三浦（1998）も，「学習が学級内にとどまらず，異学年交流や合同の授業，行事への発展，地域のお年寄りや幼児などを迎えての発表など，開かれた形になることが望まれよう。伝統的な地域の踊りは，地域から指導者を招くことも必要であろう。こうしたことがダンスへの理解と地域へ開かれた学校につながり，生涯教育を助長すると考えられる。」と，ダンス教育における展望を述べている。

また，近藤（1992）は，農村の過疎化が進んで危機に面している芸能を追体験し，民俗の心を受け止めること・人間の自然の復権をねらいとする大学生の授業実践を報告している。進藤（1992）は，「民俗舞踊研究会」の実践から，「童子のような自然体から遠く離れ，不自然かつ不自由な体となってしまっていることへの気づきが，芸能体得によって一つ一つ深まっていった。（中略）また，あらゆる恵みの源である大地への働きかけを神事として伝承してきた芸能の精神は，いのちの依って立つところを教えてくれる。」と述べている。時代の要請，ダンス教育の発展との関わりのなかで，伝統芸能・伝統的な地域の踊りの意義を強調する研究者たちの思いは熱い。

松尾（1998）は，広島県内の公立中学校教員を対象とした民俗舞踊の取り扱いに関する実態調査を行い，①約67.2％は民俗舞踊を取り扱ったことがないこと，②取り扱ったことのあるもののうち約66.7％が運動会，体育祭，文化祭といった学校行事のなかでの取り扱いであり，授業での取り扱いは約24.4％，地域との交流としての取り扱いは約15.5％であったこと，③取り扱われていた曲は，舞踊ビデオや民俗舞踊研究会の講習会などにより，全国的に伝達・普及されてきた「花笠音頭」，「ソーラン節」などが多かったこと，④学習目標としては，単に踊って楽しむ経験だけでなく，自分が生まれ育った土地や国についてあらためて実感し感動したり，日本の芸能の伝承といった目標を設定し，指導に当たっていること，⑤週５日制等との関連により体育の時間数や単元外の指導時間が削減されたことや，民俗舞踊に対する生徒の興味・関心が薄れてきており，なおかつ，指導できる教員の不在などにより，取り扱わなくなってきていることなどを明らかにした。

「（日本の民踊を含む）フォークダンス」が主教材として復活した1990年代以後も，様々な理由によって，取り扱いの割合は少なかったという実態がある。しかし，少数とはいえ，教育現場における実践報告を概観してみると，その方法は様々であるが，活動のねらいについては，「日本文化の見直し」「ふるさと教育」「郷土理解」「生涯体育」などの用語に統合される伝承活動であるといえよう。地域の保存会から指導者を招いて行った例として，猪原（1992），毛利（1992），松田（1998）らの報告があり，ビデオによる学習例としては知花（1998）の報告があり，教員あるいは生徒同士の動きを模倣する学習例としては，熊谷（1998）や西倉（1998）などの報告がある。

佐藤（1998）は「踊りはそれぞれ違いがあり，広

域に伝承されていても，各団体ごとで違ったりする。しかし，独特の味わいと共に，日本の民俗舞踊として共通することもたくさんある。」「その踊りのもつ特徴と日本の踊りのもつ共通性を踏まえて指導することが望ましい。」と述べている。

このように，学校教育において民俗舞踊を取り扱う意義をふまえ，さまざまな実践が積み重ねられている。

4．新しい流れ

東京国立文化財研究所（1999）の民俗芸能研究協議会報告書「学校教育と民俗芸能」によると，①地域・共同体というものが正しく継承していく伝統芸能と，伝承に対する感性を育てたり，体験させることなどを目標とする学校教育とを，別のこととして考えていく必要があること，②伝承と創造の関係については，“民俗芸能の子ども化”すなわち新しい時代の子ども達のリズムに合った日本の芸能が作り上げられているという実態があり，それが芸能の宿命であり，特性である，というまとめを報告している。

ここで，後者の典型例として，今や学校教育のみならず，地域社会においても一大ブームとなっている「YOSAKOIソーラン」に着目してみたい。1992年，一人の20歳の学生のひらめきから出発したとされるこのYOSAKOIソーラン祭りは，わずか10数年の間にわが国有数の祭りにまで急成長し，踊り手が主役となる祭りである。そして，そこで展開される踊りが「YOSAKOIソーラン」であり，「ソーラン節」の一節を曲に入れることと鳴子を持って踊ることという条件以外は，全く自由な表現が可能となっている（坪井と長谷川，2002)。

この踊りの源流となったのは，高知の「よさこい鳴子踊り」である。この踊り自体も，1950年代半ば，戦後の高知県の経済振興を願って立ち上げられたころには，伝統のお座敷踊りであったが，その後，幾度もの変遷をとげながら，1980年代にはロック調の強烈なリズムにのせて踊るようになり，音楽，踊り，衣装など，さまざまに個性を競い合うようになったのである。当初の振り付けはジャズダンス教師が行ったという。

その頃，北海道の稚内南中学校では，「ロック・ソーラン節」にのせて，バスケットでドリブルしながら横歩きする動作や，網引きの動作など，子ども達の生活の中から見えてくる動きを振りに取り入れた踊りが日本舞踊家によって創作された。これが，いわゆる「南中ソーラン」であり，稚内南中学校はこの踊りによって日本民謡民舞大賞を受賞したのである。これを機に，荒れた学校を再生したという様子がテレビや映画で放映され，多くの人々から支持や共感を得，一大ブームを巻き起こすこととなったのである。

これらの「ソーラン節」のブームは，かつては，生活につながる唄や踊りが働く人々のエネルギーの源であったものから，老いも若きも，世代を超えて，自由に自己表現するものとして，今日もなお進化し続けていることを，改めてわれわれに感じさせてくれる。この「ソーラン節」，あるいは，よさこい祭りの勢いにあやかろうということで，その地域に伝わる唄をロック調の曲にアレンジして踊るスタイルが全国的にも拡大しつつある。

広島市内でも，ひろしまフラワーフェスティバルという地域の祭りの場において，2002年から「きんさいYOSAKOI」が開催されるようになった。また，広島市内では，2003年６月から，スポーツインストラクターを派遣する特定非営利活動法人（NPO法人）“コーチズ”が小学校，中学校，高等学校などで「南中ソーラン」の指導を始めた。今では，舞踊ビデオや学校教員のみならず，社会人も参入することによって，「ソーラン節」や「よさこい鳴子踊り」をアレンジした踊りが，全国の小学校，中学校，高等学校の運動会・体育祭などを席巻しつつあるといっても過言ではない。

II．目　的

そこで，本研究においては，学校体育において日本の民俗舞踊を取り扱う際，新しい時代の学習者のリズムにあった教材に着目することの必要性を痛感することから,これまで，学校教育・学校体育において日本の代表的な民俗舞踊として位置づけられ，なおかつ，地域社会においてまたたく間に変化・発展を遂げた「ソーラン節」に着目して，用語から受けるイメージや一般に市販されている舞踊ビデオ視聴によるイメージ変化などを調査することにより，民俗舞踊を学校教育，学校体育において取り扱う際の知見を深めようとするものである。

III．方　法

1．調査対象と調査時期

イメージ調査は，H大学２～４年生（男：66名，女：52名，合計118名）を対象として，2003年５月に行われた。

2．調査内容と調査方法

大学生に対し，(1)“外国のフォークダンス”，“日

本の民俗舞踊”という用語から受けるイメージ，(2)日本の民俗舞踊の代表曲として用いられていると考えられる「ソーラン節」や「花笠音頭」の市販の舞踊ビデオを視聴した後のイメージなどについて，質問紙調査法を用い，一斉に回答させ回収した。

質問項目として，頭川（1995）“舞踊のイメージ探究のために有効な８つの次元”をもとにした尺度を用いた。すなわち，①明快性（明るい－暗い），②審美性（美しい－みにくい），③力動性（強い－弱い），④弾力性（かたい－やわらかい，直線的－曲線的），⑤調和性（規則的－不規則的），⑥重量性（重い－軽い），⑦難易性（むずかしい－たやすい），⑧空間性（大きい－小さい）など，８次元である。そして，それぞれの尺度について５段階でチェックさせ，＋２点から－２点までの点数化をした。

舞踊ビデオは以下の順序で提示された。①「そうらん節」：日本フォークダンス連盟『学校フォークダンス指導のてびき・小学校編』より抜粋（以下，日本F.D.連盟の「そうらん節」とする。），②「花笠音頭」：日本フォークダンス連盟『学校フォークダンス指導のてびき・中学校高等学校編』より抜粋（以下，日本F.D.連盟の「花笠音頭」とする。），③「花笠音頭」：あゆみ出版『わらび座の民舞指導・３』より抜粋（以下，わらび座の「花笠音頭」とする。），④「ソーラン節」：あゆみ出版『わらび座の民舞指導・８』」より抜粋（以下，わらび座の「ソーラン節」とする。），⑤「南中ソーラン」：テレビ東京『元祖これが南中ソーランだ！』より抜粋。

Ⅳ．結　果

１．“日本の民俗舞踊”，“外国のフォークダンス”という用語から受けるイメージについて

図１は“日本の民俗舞踊”と“外国のフォークダンス”という用語から，大学生が受けるイメージを比較したものである。横軸は８次元，縦軸は５段階評定の点数である。

“日本の民俗舞踊”という用語から，大学生は，美しい，強い，重いなどのイメージを抱き，“外国のフォークダンス”という用語からは，規則的，明るい，美しい，軽い，やわらかいなどのイメージを抱いていた。さらに，それぞれの用語から受けるイメージについて得点の差異をみると，重量性，明快性，調和性，弾力性，力動性，難易性，審美性，空間性の順に大きかった。検定の結果，審美性，空間性を除いた他のすべての尺度において有意差（$p<0.05$）が認められた。

“日本の民俗舞踊”という用語は，“外国のフォーク

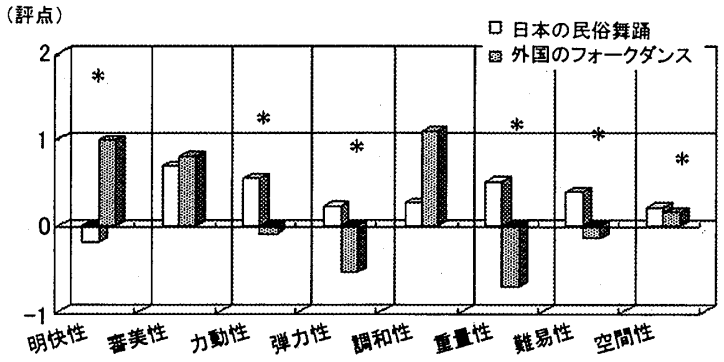

図１　“日本の民俗舞踊”と“外国のフォークダンス”のイメージ比較（＊$p<0.05$）

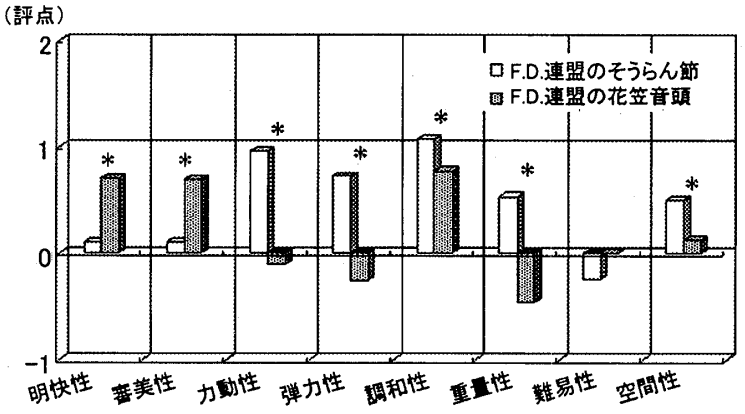

図２　日本フォークダンス連盟による舞踊ビデオのイメージ比較（＊$p<0.05$）

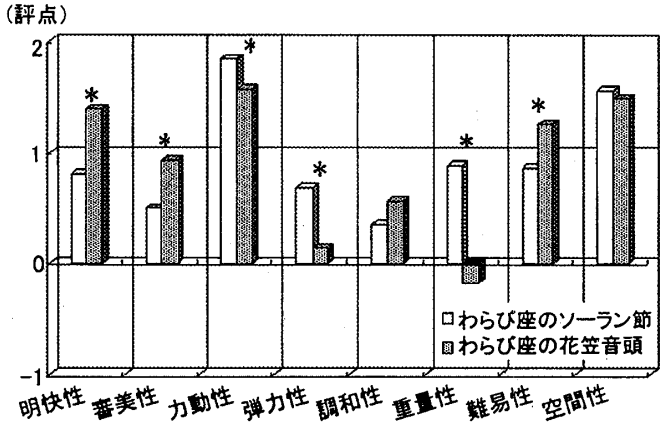

図３　わらび座による舞踊ビデオのイメージ比較（＊$p<0.05$）

ダンス”という用語に比べて，重く，暗く，不規則的で，やわらかく，強く，むずかしいなどの方向へイメージされる傾向がみられた。また，イメージが両極に分かれる傾向を最も強く示したのは重量性であった。

2．舞踊ビデオによるイメージ比較

1）「花笠音頭」と「ソーラン節」のイメージ

①日本F. D. 連盟制作の舞踊ビデオ

図2は，日本F.D.連盟制作の「花笠音頭」と「そうらん節」の舞踊ビデオ視聴により大学生が受けたイメージを比較したものである。

日本F.D.連盟の「そうらん節」からは，規則的，強い，かたい，重い、大きいなどのイメージを抱き，「花笠音頭」からは，規則的，明るい，美しいなどのイメージを抱いていた。さらに，それぞれの舞踊ビデオから受けるイメージについて得点の差異をみると，力動性，重量性，弾力性，明快性，審美性，空間性，調和性，難易性の順に大きかった。検定の結果，難易性を除いた他のすべての尺度において有意差（$p<0.05$）が認められた。

日本F.D.連盟による漁猟の踊り「そうらん節」は，農耕の踊り「花笠音頭」に比べて，強く，重く，かたいなどの方向へイメージされる傾向がみられた。また，イメージが両極に分かれる傾向を最も強く示したのは，重量性であった。

②わらび座制作の舞踊ビデオの場合前

図3は，わらび座制作の「花笠音頭」と「ソーラン節」の舞踊ビデオ視聴により大学生が受けたイメージを比較したものである。

わらび座の「ソーラン節」からは，強い，大きい，重い，むずかしい，明るい，かたい，美しいなどのイメージを抱き，「花笠音頭」からは，強い，明るい，大きい，むずかしい，美しい，規則的などのイメージを抱いていた。さらに，それぞれの舞踊ビデオから受けるイメージについて得点の差異をみると，重量性，明快性，弾力性，審美性，難易性，力動性，調和性，空間性の順に大きかった。検定の結果，調和性，空間性を除いた他のすべての尺度において有意差（$p<0.05$）が認められた。

わらび座の「ソーラン節」は，「花笠音頭」に比べて，重く，明るいなかでもどちらかというと暗い傾向にあり，かたいなどの方向へイメージされる傾向がみられた。また，イメージが両極に分かれる傾向を示したのは，重量性のみであった。

③小　括

日本F.D.連盟，わらび座ともに，漁猟の踊り「そうらん節」は，農耕の踊り「花笠音頭」に比べて，重く，かたいなどの方向へイメージされる傾向がみられ，イメージが両極に分かれる傾向を最も強く示したのは，重量性であった。同じ“日本の民俗舞踊”であっても，地域が異なり，生活形態が異なれば，動きも異なり，当然のことながら受けるイメージも異なる。

2）制作者の異なる舞踊ビデオにおける「ソーラン節」のイメージ比較

図4は，日本F.D.連盟の「そうらん節」，わらび座の「ソーラン節」，「南中ソーラン」の舞踊ビデオ視聴により大学生が受けたイメージを比較したものである。「南中ソーラン」からは，強い，大きい，むずかしい，明るい，美しい，重いなどのイメージを抱いていた。（日本F.D.連盟の「そうらん節」のイメージについては1）①を，わらび座の「ソーラン節」のイメージについては1）②を参照。）

さらに，それぞれの舞踊ビデオから受けるイメージについて得点の差異をみると，日本F.D.連盟の「そうらん節」と「南中ソーラン」の間では，難易性，空間性，明快性，審美性，力動性，調和性，弾力性，重量性の順に差が大きかった。検定の結果，重量性を除いた他のすべての尺度において有意差（$p<0.05$）が認められた。また，わらび座の「ソーラン節」と「南中ソーラン」の間では，審美性，難易性，重量性，明快性，弾力性，調和性，空間性，力動性の順に差が大きかった。検定の結果，調和性，空間性，力動性を除いた他のすべての尺度において有意差（$p<0.05$）が認められた。

「南中ソーラン」は，日本F.D.連盟の「そうらん節」に比べて，むずかしく，大きく，明るく，美しく，強いなどの方向へイメージされる傾向がみられ，また，わらび座の

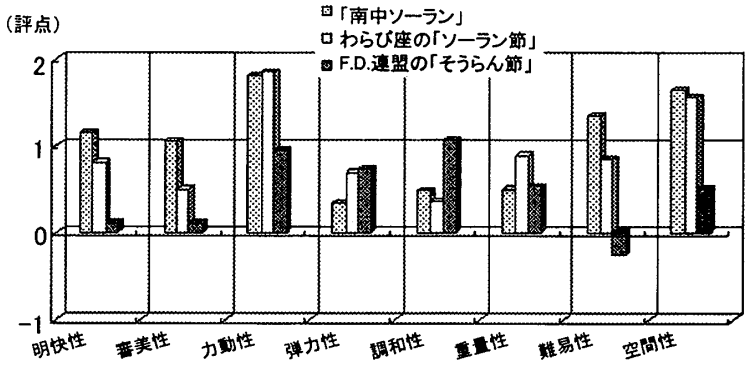

図4　「ソーラン節」舞踊ビデオイメージ比較（$*p<0.05$）

「ソーラン節」に比べて，美しく，むずかしく，軽いなどの方向へイメージされる傾向がみられた。また，イメージが両極に分かれる傾向を示したのは，日本F.D.連盟の「そうらん節」に対するたやすい方向へのイメージのみであった。

一口に「ソーラン（そうらん）節」といっても，曲のアレンジによって動きも異なり，当然受けるイメージも異なってくる。それぞれの動きが振付けられた制作年などについては定かではないが，流行した年代が現在に近い舞踊ビデオほど，明るい，美しい，強い，むずかしい，大きいなどのイメージで受け止められていると考えられる。

V. 考　察

本研究において，“日本の民俗舞踊”，“外国のフォークダンス”という用語から受けるイメージについて，大学生が“外国のフォークダンス”という用語からは軽いイメージを抱き，“日本の民俗舞踊”という用語からは重いイメージを抱いていた。多くの実践報告等（猪原，1992；頭川，1995；松尾，1996；松田，1998；熊谷，1998；西倉，1998；松尾，1998）におけるイメージや先入観は，「ださい，かっこ悪い，古くさい」といったものであり，本研究の結果を支持するものであると考えられる。

また，重く，暗く，不規則的で，やわらかく，強く，むずかしいなどの方向へイメージされる傾向がみられた“日本の民俗舞踊”ではあるが，さらに，漁猟の踊り「そうらん節」と，農耕の踊り「花笠音頭」とではイメージが分かれた。川村（2000）が「“民俗”という言葉を，人びとの生きるスタイル（流儀），“生存の技法”と幅広くとらえている。」と述べているように，地域性，生活形態の多様性を踊りに反映したものがまさに民俗舞踊であるとイメージされていることが明らかとなったといえよう。

さらに，重く，かたいなどの方向へイメージされる「ソーラン（そうらん）節」の舞踊ビデオではあっても，曲のアレンジや動きが異なることによりイメージも異なり，流行した年代が現在に近い舞踊ビデオほど，明るい，美しい，強い，むずかしい，大きいなどのイメージで受け止められていた.このことは，舞踊ビデオを視聴することにより，それ以前の日本の民俗舞踊に対する重いイメージを払拭し，また，多くの実践報告や研究などの成果として認められる日本の民俗舞踊に対する新たな認識を準備するものと考えられる。

VI. まとめと今後の課題

大学生を対象として行った民俗舞踊に関するイメージ調査より，次のようなことが明らかとなった。(1)“日本の民俗舞踊”という用語は，重い，暗い，不規則的，やわらかい，強い，むずかしいなどのイメージで受け止められる傾向がある。しかしながら，舞踊ビデオの視聴により，(2)同じ“日本の民俗舞踊”といわれるものであっても，地域が異なり，生活形態が異なれば，動きも異なり，当然のことながら受けるイメージは異なる。なおかつ，(3)同じ「ソーラン（そうらん）節」であっても，曲のアレンジによって動きも異なり，受けるイメージも異なる。さらに，(4)流行した年代が現在に近い舞踊ビデオほど，明るい，美しい，強い，むずかしい，大きいなどのイメージで受け止められる傾向がある。これらのことから，舞踊ビデオの視聴により，日本の民俗舞踊に対する新たな認識を準備することができると考えられる。

社会現象ともいうべきブームを巻き起こしている「南中ソーラン」は，強烈なロックの曲調にも裏付けられ，とりわけ，明るく美しいイメージで受け止められており，この点から，現代を生きる多くの人々の興味・関心を呼ぶものであることが推測される。そして，そのように興味・関心が高いものであれば，学習者も時間を惜しむように練習を重ねるであろうし，むずかしいというイメージも克服され，その結果として，無上の達成感を得ることができるのであろう。

有史以来，民俗舞踊は生活の場で踊られてきた。「ソーラン節」一つを例にとってみても，過去，現在，そして，未来へと進化しつづけているのは明らかである。そのような，民俗舞踊の伝承と創造，普遍性と独創性などをめぐって，今後ますます議論が高められる必要があろう。また，地域の人々の生活や，特有の自然，文化などを幅広く授業に取り入れた，従来型の，学校だけで行っていた学習・指導の枠を超え，地域住民と連携した活動も多様に展開されるものと考えられ，その具体も求められている。

本研究により，学校・地域における民俗舞踊をめぐる状況の変化・発展をふまえ，その概念や，現代における民俗舞踊の教育的意義を模索することができた。学習者の興味・関心を受け止め，現代社会を生き抜くことのできる力を育成するためにも，指導者自身の縦断的かつ横断的な教材観，価値観が重要な意味をもつことはいうまでもない。今後とも，学校教育・学校体育において民俗舞踊を取り扱う際，日本の伝統・文化の尊重・伝承ということの意味，あるいは，その可能性と限界性などについて問い続けていかなければなら

ないと考えている。

【引用・参考文献】

阿部広力・川村幸男（1988）ソーラン節．学校体育研究同志会編　たのしい体育シリーズ⑧なわとび・民舞．ベースボール・マガジン社：東京，96-124.

知花英子（1998）得意なダンスをつくる選択制の授業．中学校体育・スポーツ教育実践講座刊行会編　中学校体育・スポーツ教育実践講座第11巻楽しく踊り豊かに表現するダンスの授業．ニチブン：東京，105-114.

本田郁子（1992）地域に根ざしたダンス教育をめざして．松本千代栄監編　ダンスの教育学第６巻全国の研究・実践事例．徳間書店：東京，208-209.

川村邦光（2000）〈民俗の知〉の系譜－近代日本の民俗文化．昭和堂：京都，157-168.

小林康正（1995）伝承の解剖学－その二重性をめぐって－．福島真人編　未発選書第２巻　身体の構築学．ひつじ書房：東京，207-260.

小池淳一（2002）伝承．小松和彦ほか編　新しい民俗学へ．せりか書房：東京，52-62.

近藤洋子（1992）悠久の時を有す日本民俗舞踊の授業．松本千代栄監編　ダンスの教育学第６巻全国の研究・実践事例．徳間書店：東京，186-189.

久保健（1988）民舞の指導．学校体育研究同志会編　たのしい体育シリーズ⑧なわとび・民舞．ベースボール・マガジン社：東京，72-75.

熊谷美希子（1998）おくに自慢を探る民俗舞踊の授業．中学校体育・スポーツ教育実践講座刊行会編　中学校体育・スポーツ教育実践講座第11巻楽しく踊り豊かに表現するダンスの授業．ニチブン：東京，81-88.

猪原真知子（1992）日本民踊をとり入れたダンスの授業．松本千代栄監編　ダンスの教育学第６巻全国の研究・実践事例．徳間書店：東京，183-185.

松田節郎（1998）地域との交流をめざした民俗舞踊の授業（男女共習）．中学校体育・スポーツ教育実践講座刊行会編　中学校体育・スポーツ教育実践講座　第11巻楽しく踊り豊かに表現するダンスの授業．ニチブン：東京，168-174.

松尾千秋（1996）生涯学習におけるダンス教材に関する研究－ひろしまフラワーフェスティバルに着目して－．広島大学教育学部紀要，2（45）：171-177.

松尾千秋（1998）学校体育における民俗舞踊の取り扱いに関する研究－広島県・公立中学校を中心として－．広島大学教育学部紀要，2（47）：101-109.

三浦弓杖（1998）ダンスとの良い関係を育てる教育へ．中学校体育・スポーツ教育実践講座刊行会編　中学校体育・スポーツ教育実践講座第11巻楽しく踊り豊かに表現するダンスの授業．ニチブン：東京，255.

毛利鏡子（1992）白石踊りとふるさと教育．松本千代栄監編　ダンスの教育学第６巻全国の研究・実践事例．徳間書店：東京，241-247.

村瀬幸浩編著（1975）体育の授業　日本の踊り．民衆社：東京

中森孜郎（1990）日本の子どもに日本の踊りを．大修館書店：東京

中村久子（1992）阿波踊りと有名連．松本千代栄監編　ダンスの教育学第６巻全国の研究・実践事例．徳間書店：東京，248-251.

西倉志津佳（1998）運動会につなげる民俗舞踊の授業．中学校体育・スポーツ教育実践講座刊行会編　中学校体育・スポーツ教育実践講座第11巻楽しく踊り豊かに表現するダンスの授業．ニチブン：東京，152-155.

佐藤健二（2002）郷土．小松和彦ほか編　新しい民俗学へ．せりか書房：東京，311-321.

佐藤雅子（1998）フォークダンス，民俗舞踊の技術とその指導．中学校体育・スポーツ教育実践講座刊行会編　中学校体育・スポーツ教育実践講座第11巻楽しく踊り豊かに表現するダンスの授業．ニチブン：東京，221-224.

関一敏（2002）民俗．小松和彦ほか編　新しい民俗学へ．せりか書房：東京，41-51.

進藤貴美子（1992）「大地の芸能をもとめて－土といのちの響鳴」の舞台をつくる．松本千代栄監編　ダンスの教育学第６巻全国の研究・実践事例．徳間書店：東京，224-227.

高橋悦子・千田みかさ・戸田玲子（1988）みかぐら．学校体育研究同志会編　たのしい体育シリーズ⑧なわとび・民舞　ベースボール・マガジン社：東京，126-161.

高田敏幸・渡辺孝之（1988）荒馬．学校体育研究同志会編　たのしい体育シリーズ⑧なわとび・民舞．ベースボール・マガジン社：東京，76-95.

東京国立文化財研究所（1999）民俗芸能研究協議会報告書「学校教育と民俗芸能」．http://www.tobunken.go.jp/~geino/index.html

坪井善明，長谷川岳（2002）YOSAKOIソーラン祭り．岩波書店：東京，183-202.

頭川昭子（1995）舞踊のイメージ探究．不昧堂出版：東京，192-194.